

テキスト産出の原理

ジョイスにみる頭韻とアナグラム

道木 一弘

はじめに

通常「執筆過程」と言えば、作品と作者の関係、具体的には執筆のプロセスや草稿研究が中心になる。その意味で、ジョイス (James Joyce, 1882-1941) 作品における頭韻とアナグラムを扱う私の発表は「通常」の範囲を逸脱していることになるだろう。しかし、作品 (text) が書かれるとき、作者は自らが紡ぎだす言葉を全て完全にコントロールしている訳ではない。言葉がすぐれて社会的かつ自律的な存在であり、作品が個々の作家の意識のレベルを超えた、言語のネットワークによって成立していることは、たとえば間テキスト性の問題として認知されている。ジョイスはこうした言語の可能性を積極的に活用した作家であった。今回のシンポジウムにおける私の立場は、「執筆過程」が通常含意する内容を言語現象にまで拡大し、そこで働くメカニズムあるいは「力」の解明を目指している。

周知のように、近年の文学研究はインターネットの目覚ましい普及によって様変わりした。ジョイス研究も例外ではなく、James Joyce Digital Archive では *Ulysses* と *Finnegans Wake* の草稿が年代順に整理されたものを無料で閲覧することができる。文字通り「執筆過程」を詳細に辿ることが可能なのだ。またアイルランド国立図書館のサイト The Joyce Papers 2002 では、部分的ではあるがジョイスの自筆原稿の写真データを同じく無料で公開している。海外の研究者にとっては実に有り難いことである。ただ、必ずしも全ての草稿が残っている訳ではなく、また、何らかの事情で閲覧できないものもある。今回取り上げる「イーヴリン」

(“Eveline,” 1904) および『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) の冒頭部分は、こうした例であり、草稿段階で作者が何らかの加筆や修正を行った形跡は確認できない。また、作者自身による校正過程を一定程度反映した市販のガブラー版においても同様である。

「イーヴリン」における頭韻とアナグラム

ジョイスの作品における頭韻 (alliteration) とアナグラム (anagram) を考える上で、彼の最初の短編集『ダブリンの人々』 (*Dubliners* 1914) に収められた「イーヴリン」は指標となる作品である。頭韻はその冒頭に置かれた以下の文に現れる：“She sat at the window watching the evening invade the avenue” (192)。通常の定義での頭韻は“window”と“watching”であるが、広めの定義によれば“she”と“sat” (語頭の同じ文字) もそうである。面白いのは、後半の三つの単語“evening,”“invade,”“avenue”である。[v] の音を核として似た母音が音節を作りリズムカルで、ある種の頭韻と見なすことができるだろう。さらに言えば、この短編のタイトル *Eveline* は“evening”と頭韻になっている。*Eveline* という名称は *Eve* の変形と考えられ、“evening”にも *Eve* を読み取ることができる。一方、“avenue”はどうか。音節で考えれば三つに分けられるが、視覚的には *ave-nue* と二つに分けることができる。すると *Ave* が取り出され、そこから *Maria* が想起される。言うまでもなく、イヴとマリアはキリスト教における二大ヒロインであり、前者が人類を堕落させ、後者はその執り成し神に行く。この二人の名前を元の文に戻すと以下のような文が得られる：She sat at the window watching *Eve* invade *Ave* (*Maria*)。 「イヴがマリアに侵入する」。

このような変換は、根拠のない言葉遊びに見えるかもしれない。しかし私はこの作品自体に、こうした変換を促す「力」が備わっているのではないかと考えている。理由は二つあって、一つは語彙選択、もう一つは物語のプロットに関わるものである。まず、語彙選択であるが、“invade”という言葉が持つ違和感に注目したい。

「通りに夕闇が迫る」という英語の表現では、enter や spread 等、比較的ニュートラルな動詞を使うこともできる。ジョイスがそのような動詞を避けて、あえて“invade”という特殊なコノテーションを伴う動詞を使ったことは、この一文に彼がかなりの「重み」を付けていたこと、そこに読み手の注意を引こうとしていたことの表れであろう。つまり、これは上述したような変換へ読者を誘う「仕掛け」に思われるのである。

物語のプロットについて言えば、主人公のイーヴリンが若い船員フランクと父の家を出て南米へ駆け落ちを計画するが、乗船直前に体が「麻痺」して動けなくなり駆け落ちに失敗するというものである。ここでポイントとなるのは、カトリック女性の彼女が、死んだ母に代わって家族を守る役割を期待されており、そのような役割のモデルこそ聖母マリアであったということと、イーヴリンを父の家から誘い出すフランクには、イヴを誘惑して樂園からの追放を惹起する蛇の役割を見ることができることである。正にイーヴリンは、マリア的な

生活（父=神への献身）からイヴ的な墮落（父=神への不服従）へと向かうのだが、このプロットが、“Eve invade Ave (Maria)” という一文において暗示されていると思われるのである。

次に、「イーヴリン」におけるアナグラムについて見てみよう。私の考えでは、イーヴリンの母親が、死の直前に発した謎の言葉 “Derevaun Seraun!” (197) がそれである。この言葉の解釈をめぐるのは、ジョイス研究者の間で様々な試みがなされてきた。ただ、そうした試みに共通するのは、この言葉を音韻的に近い意味のある言葉に読み換えることであり、どれも決定的なものではない。しかし、これをアナグラムであると考えれば、先ず “eva” と “sea” が、次に “run” と “under” が抽出される。その上でこれら四つの単語を組み替えると “Eva, run undersea!” という一文が得られる。Eva は Eve の異形であるから、「イヴよ、海の中を行け！」という意味になる。さらに、Eva の前後を逆にすれば Ave となるので、上述したようなマリアからイヴへと変化するイーヴリンの可能性を暗示する言葉でもある。

物語の中では、波止場に着いたイーヴリンは、フランクが自分を「海の中に引きずり込み」、「溺れさせる」のではないかという恐怖に襲われる。海はフランクが引き寄せる「新しい世界」の隠喩であり、住み慣れたダブリンを離れ未知の土地へ向かうことは、彼女に自らの「溺死」をイメージさせるのである。ところが、もし母の謎めいた言葉がアナグラムであり、「海の中へ行く」ことを勧める言葉として読むことができるのであれば、母はむしろ「溺死」すること、すなわち「新しい世界へ身を投じる」ことを彼女に促していることになる。このように考えると、作品の冒頭に現れる頭韻と、作品中の謎の言葉（アナグラム）は、直線的な文のつながりとは別の次元で、作品の意味産出を行っていると言えるだろう。

『ユリシーズ』冒頭の頭韻とアナグラム

「イーヴリン」に見られた頭韻とアナグラムの関係は、ジョイスの代表作『ユリシーズ』の冒頭部分においても見出される。頭韻が現れるのは “stately” と “stairhead”、“bearing” と “bowl” および “mild” と “morning” の三つのペアである。興味深いことに、この三つのペアの頭韻の部分は、それぞれこの長編小説の主人公の名前の綴りの最初の音と一致している：Stately / stairhead → Stephen; bearing / bowl → Bloom; mild / morning → Molly. 続いて、“plump,” “Buck,” “Mulligan” に [A] の音が共通して現れ、“crossed,” “dressed,” “sustained” には [s] と母音が連結した音節が現れる。これら二つのトリオを組み合わせると、lusse, uess, ullisus が得られ、文字を相互に入れ替えると ulsse, uless, ulisus と不完全ながら Ulysses に似たスペリングが三つ得られる。さらに文字を相互に交換すると、ulises が得られるが、これは Ulysses のスペイン語綴りである（発表では変換を明示するためチャート図を付したが、紙幅の関係で割愛する）。

『ユリシーズ』はホメロスの叙事詩『オデュッセイア』を下敷きにしており、一介の広告取りブルームがトロイ戦争の英雄ユリシーズに、彼の不貞な妻モリーが貞女ペネロペに、芸術家志望の貧乏青年スティーヴンが彼の息子テレマコスに相当する。上述の不完全な三つのスペリングは、ホメロスの叙事詩の三人と比較した場合の彼らの不完全さを暗示するのかもしれない。また、ブルーム (Bloom) の妻モリー (Molly) が英国の植民地ジブラルタル出身であることを考えると、最後に得られるスペイン語綴りの Ulises は、彼女こそ真のユリシーズであるということを示唆するとも考えられ、現代の「英雄」は女性なのだという解釈も可能となる。

アナグラムについては、マリガンが唱えるミサの言葉 “Introibo ad altare dei” (神の祭壇へ赴かん) がこれに相当する。このラテン語からは、先ず trio, bad, alter が抽出され、残った文字から in a dei (day) を作ることができる。最後に、o を文頭に出せば、“O, bad trio alter in a day.” (おお、不幸なトリオが一日で変わる) という一文が成立する。トリオとは、ここではスティーヴン、ブルーム、モリーのことと考えられる。三人の「冴えない」作中人物を神話的な英雄に比し、彼らの一日 (1904年6月16日) の行為をつぶさに記述するこの作品は、確かに「不幸な三人」を「一日で変化」させると言えるだろう。

結び

今回取り上げたジョイスの作品における頭韻とアナグラムの関係性がテキストの他の部分や、ジョイスの他の作品にも広く見出されるのかさらなる調査が必要である。核心となるのは頭韻とアナグラムの意味産出の働きを可能にするものは何か、それが何に起因するのかである。周知のようにアナグラムの研究で先駆的な仕事をしたのはソシュール (Ferdinand de Saussure) であるが、彼はその確認を作者の意図に求めたため、最終的に挫折した。しかし、その仕事はポスト構造主義以降、例えば丸山圭三郎らによって再評価されている。ただ、ソシュールのアナグラム研究には頭韻への言及があるにもかかわらず、両者の関係性については、ソシュール自身および丸山においても明確には焦点化されておらず未解明のままである。今回、私が行ったジョイス作品による頭韻とアナグラムの分析は、両者の関係性の解明の一つの糸口になるのではないかと考えている。